OKASHI
LOVERS
R-18

まえがき

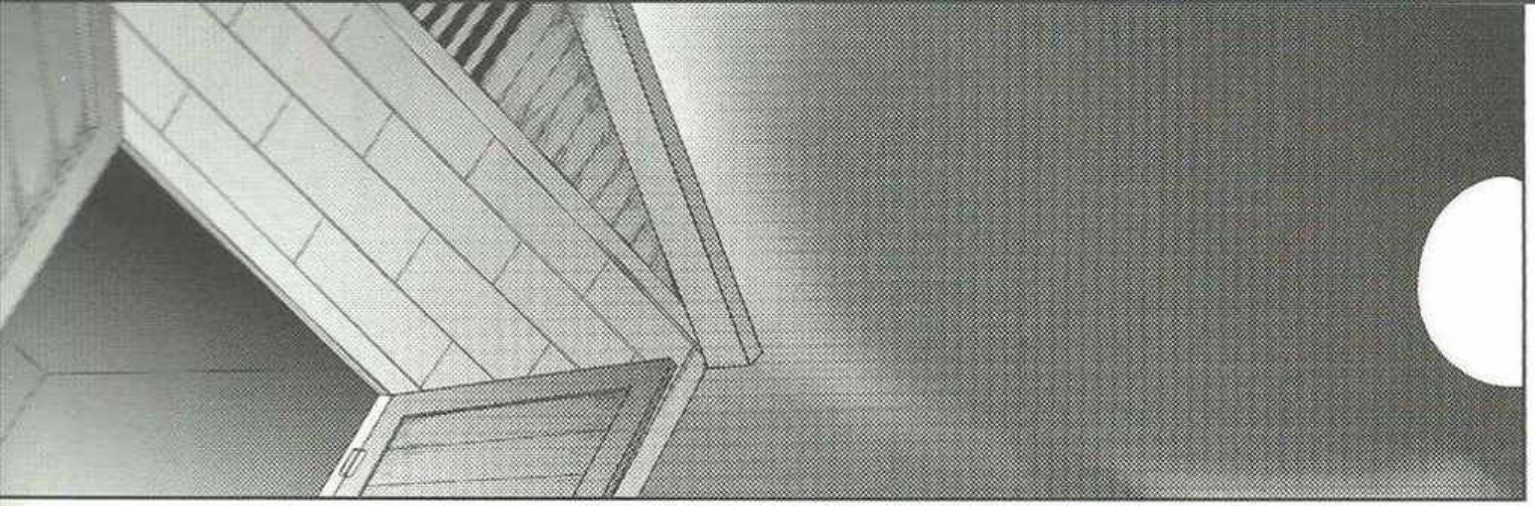
はじめての方ははじめまして。そうでない方はこんにちは。
今回はページの都合で、あとがきならぬ前書きとなりました。
入稿限界まで後３時間となり、やっとこの文章を書いております。
突然のＦＦ本ということで、なかなか試行錯誤しましたが、
とりあえず本にすることができました。
ファリスにしても、まだまだ描きたいことが色々あるので、
今後もこのジャンルについては続けられればなぁ、と思います。
ＦＦ7のティファとファリスで二大勢力ですね。
ディシディアが楽しみです。
そんなこんなで、今回はこの辺で。それでは。

奥付

誌名	：OKASHILOVERS
発行者	：寒天
発行サークル	：寒天示現流
発効日	：2010/12/31
印刷所	：くりえい社様
WEB	：http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/

※18 歳未満の方の購入を硬く禁じます。

OKASHILOVERS



今日もこんなに汚れちまって
海賊稼業も楽じゃねえや
結構ニオうなぁ……

ふう

ふぇっ!?

生きるためには
仕方ないとはいえ……
やっぱ気になっちまうなぁ

おかしらッ

大好きだァ

なっ

おまっ何言って……

それより出てけッ

ムニュッ♥

おかひら……らいすき……れす

……お前酒臭いぞ

シュパッ

そんなこたぁあーせんッ

もういいから休めよ……

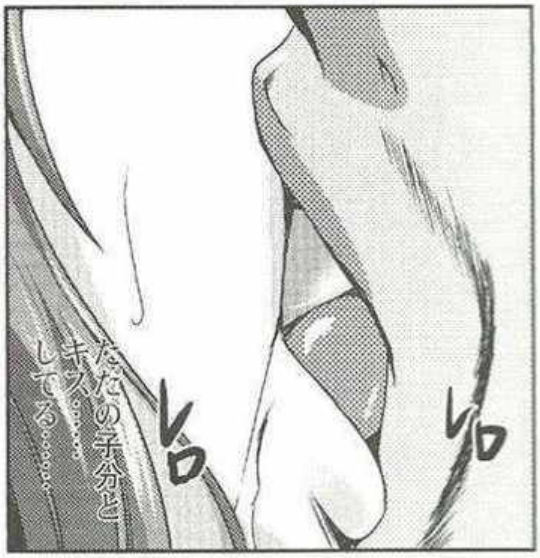
休みません！
それよりおかしら……
大好きデス！
キラッ
ほ……
本気かよッ
当然ッスよ！
ツーかぶっちゃけ
おかしらで毎晩
抜いてますし
ポッ
お……おまっ
正気かよッ
ツーかそんなカムアウトすんなよ！
ボッ
うぇぇぇぇぇッ
正気
どぇ～す♪

ぷるんっ
ひやっ
やめっ
ぷるぷる
バカッ
やめろよ
こんなの
ムニュン
ムニュ
やっ
チュパ
チュパ
ひいんッ
レロ
レロ
レロ
レロ

やだっ
やめろよぉ
ヒクッ
はっ
ひあっ
すげぇ
うめぇ……
おっぱい……
吸われてる
チュプッ
やぁ
おかしらの
おっぱい
ムニュッ
ムニッ
ムロッ
ヒク
ヒク
ホ……
ホントに
おかしらぁッ
おかしらッ
やめてくれ
よぉ
おかしらぁッ
嫌だ……
こいつの事は嫌い
じゃないけど……
こんなの……
大好きなんだよォ
おかしらぁ
そんなに……
本気でオレの事……
でも……やっぱりッ
……ゴメ

んむう

な……んで
いきなり……
キスして



むれあっ♥
ホワワン
はぁ……おかしらの腋
いいニオイだぁ
ひゃうラッ
レロ
とろっ
レロ
おかしらの腋タマんねェ……汗臭くてツンとする
おかしらのニオイ……たまんねぇ
やめっ匂いなんて嗅ぐなよォ
クン
スン
エロすぎだよォ
ふぁぁぁッ
ピクッ
嫌ッ……
ぶるっ
ダメだよこんなの……ッ
ひゃめッ
イひぁッ

ねぇ……おかしらァ
ガマンできねェッス
ぶるんっ
ひぁッ
俺……もう
おかしらがエロすぎて……
や……やめろッ
シュッ シュッ シュ
シュッ シュ
そんなのコッチ向けるなァッ

はぁ……
はぁっ
ばかッ
何やって……
待ッ
おかしらっ
すみませんッッ
んぐおおッ!?

うおぉ……ッ

おかしらのクチ……ッ
最高だァッッ

息がッ

チンポが……
ノドを突いてッ

苦しい……のにッ

気持ち……いい
……なんてエッ

おかしら……
おかしらぁッ
んぶうッ
んもっ
ずるっ
ほごォ
もう……
射精るッッ
ズリッ
ズリッ
ズリッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
んんぶうッ

ぶるっ
ゲポ
ゲポ
どっ
ゲポッ
ぶるっ
ガッ
おかしらッ
クチだけじゃもう
満足できねェ
ッスよォ……
シコッ
シコッ
シコッ
シコッ
なッ……
何言ってんだよ……
どっ
もう気は
済んだだろ……!?
こんなエロい
おかしらを
見せられたら……
俺
もう……ッ
ガッ

や……やめッ

そんなのコッチに……ッ

ビクッ

ビクッ

バカぁ……ッ ほ、ホントに……

っておまッッ きた 汚ッ

そこはッ 違……違うからァ

ひゃあああッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

オプッ

オプッ

うぉおおっ
スゲェ！
すぽぉっ
おかしらの尻穴ッッ
スゲェ締め付けてくるッッ
いくらでも搾り取られ
ちまうよォッッ
ぱぽっ
ぐぽぉ
ぐぷっ
ひぁっ
ぷるんっ
ぷるっ
やめろよォ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

ひぁあッ

お尻ッ
めくれるぅ

あひぃ♥

あっ

あぁっ

尻を突かれて
気持ちイイなんて……

こんなのおッ

んひぃっ♥

もう……射精るッ

おかしらッ

はっ

はぁっ

ひぁぁッ
ドプッ
ドプッ
でてりゅっ
でてるよぉッ
はぁ
はぁ
おひりッ
ビュクッ
ビュルルルッ
おひりがっ
あついのぉっ
お尻にこんなに射精したら……
お尻で孕んじゃうよぉ……♥
……んはぁッ
ぬぽぉ
はぁ……また……こんなに……っ
はぁ
はぁ
ビュクッ
ビュクッ
ビュルッ
ビュクッ

ビュルルルッ
おひぃぃぃ
ビュクッ
ひぁぁッ
ドプッ
ドプッ
ドプッ
でてるよぉッ
でてるゆっ
はぁ
はぁ
がっ

お尻にこんなに射精したら……
お尻で孕んじゃうよォ……♥
……んはあッ
はあ……また……こんなに……い
はあ
はあ
ぬぽぉ
ぶぴっ
ぶぴっ
ぶぴっ
ぶぴっ

おかしらが綺麗にしてくださいよぉ
はぁ……はぁ こんなに汚れちまった……
ま……まだ続けるのか……？
これ以上やったらもう後戻りできなくなる……ッ
結局シちゃってるし……
ドキ
ドキ
んっ
ドキ
はぁッ
はぁ
まだこんなに……ガチガチなのかよオ♥
あんなに射精したのに……
またビクビクって
おっぱいの間で撥ねてる……ッ
うぅぅッ
おかしらッ おかしらァッ！
ぶるる

ビッ
ビッ
ビッ
ん
う
ぅ

これでもう……
気がすんだよ……
はぁ
はぁ
はぁ
ぷるるっ
ぶるっ
どくっ
はぁ
はぁ
……な
Z
Z
Z

ギィ
ガチャッ
おかしら
おはようございます！
ドキ
ドキ
お……おはよぅ……
いヤー しかし昨夜はおかしな夢を見ちまったぜ。
何故か俺がおかしらとセックスしててさ しかもおかしらが何故か女の子なんだよ！……俺ちょっとゲイッ気あるのかなぁ……
テメェ何羨ましい夢見てやがるんだ！
こいつら……
人の気も知らないで……ッ
きゃっ
今日も仕事だッ
ホラお前ら
いつまでバカ話してんだ！
四十秒で支度しな！
りっ：
Fin

FINAL FARIS FANTASY

【ミノタウロスのサリサ】

by 忌呪

自分は敗者だ。敗者である以上、勝者には従わなければならないし、人間が相手であるにせよ魔物が相手であるにせよ、自身どれだけ男勝りであろうが女という性から逃れる事がかなわぬからには、海賊の頭領を務めていた頃から必然としてその手の凌辱もあるものと想定はしていた。

しかしファリスには誇りがあった。ただ女という性だけを欲するような下衆な輩に穢されるくらいなら、舌を噛むなりして自ら命を絶とう、と覚悟を決めてもいたものだ。自分一人の命で済む問題であるならば、今回のコレもそうしていただろう。

「ん、く……ち、畜生……ッ」

「やれやれ、ヌルイな。そんな程度ではいつまで経ってもイけやせんぞ。真面目にやっているのか、うん？」

屈強な男の腕ほどもありそうな肉棒――否、肉塊をファリスの胸に挟み、扱かせながら、ミノタウロスはそう言ってモーニングスターを気絶しているバッツの頭に押し当てた。

「これではやはりこいつには死んでもらうしか無さそうだな」

「ッ!?　や、やめろ！　……もっと、頑張るから……！」

ミノタウロスの牛面が愉悦に歪む。肉棒も醜悪ならその持ち主も吐き気を催す醜さだ。が、その巨躯に秘められた暴力は屈強そのもので、このフォークタワーに封印されし二大魔法がうちホーリーを手に入れんと最上階まで登ってきたバッツとファリスは敗北を喫してしまった。

二人の力は決して低かったわけではない。クリスタルに選ばれた者として、今までにも幾多の困難、様々な強敵を打ち破り、ここまで来たのだ。

だが、その力の殆どは魔法に依るところが大きすぎた。

魔法を使用することの出来ないこの力の塔で、今まで魔法にばかり頼って冒険してきた二人は当然のように苦戦を余儀なくされた。慣れない戦士系ジョブでは満足に力を発揮することも出来ず、その事をどれだけ悔やもうとも全て後の祭りだった。

敗北した二人を睥睨しながら、ミノタウロスが持ち出した取引は単純そのもの。千年の長きに渡り封印されてきた自分の性欲の捌け口となれ……ただ、それだけだった。

（クソッ！　バッツの命さえ懸かってなかったら、こんな奴のクソチンポ、今すぐにでも噛み千切ってやるのに……！）

チラ、と横目で一瞥したバッツは、倒れたままだ目覚めそうな気配は無かった。ファリスを庇い、ミノタウロスの渾身の一撃をまともに喰らってしまったのだから無理も無い。

（俺のせいで……バッツ……ごめん）

涙が溢れそうになるのは、そんな不甲斐なさのせいだ。決して今のこの状況を女として怖れ、厭い、脅えて泣きそうになっているわけではないのだと自分に言い聞かせる。

「クックククク。千年ぶりの雌はやはり、いい。……お、おお。いいぞ、もっと、もっと強く挟んで、扱け」

「く……ん、……ふ、くぅ……はぁ」

愉悦に浸るミノタウロスを見上げ、忌々しげに乳房を押す両手に力を込める。激しく反り返ったミノタウロスの剛直は少しでも挟む力を緩めると胸の中から逃げ出してしまい、その度にこの牛頭の魔人はバッツへと鉄球を突きつけるのだ。

「その調子だ。ただ大きいだけではなく、ハリ良くきめ細やかな、最高の乳だ。お前達がこの最上階に現れた時から、狙っておったのよ。おかげでこんなにも滾っているわ」

（クソッ、馬鹿みてぇに膨らませやがって……しかも扱くたびに、まだ大きく……太く、硬くなってく、みたいだ……）

ミノタウロスの背丈はバッツやファリスの二倍近くもあろうか。が、その股間に隆々とそそり勃つ獣欲棒は体格差を考慮してもあまりに異常なサイズだった。

陰茎は先述の通り男の腕、それもファリスの子分の海賊達の中で最も腕力に優れた男の腕と同程度はあり、歪に節くれたそこにはゴツゴツとしたイボと、これもまた野太い血管が大木に絡み付く蔦のように浮き出、激しく脈打っている。

（それに……何なんだよ、この……こいつの……先っぽ）

THE MINOTAUR'S SARISA

亀頭はまさしく肉の凶器と呼ぶに相応しいモノだった。
自分達を圧倒的な力で薙ぎ払い、殴り倒したモーニングスター。その先端についている鉄球にも似たそこにはファリスの口並に大きな尿道口がパックリと坑を開いていた。
(デカい……ホントに、……化物だ)
何もかもが人間の規格とは異なっている。魔物の雄をこうして目の当たりにし、ファリスは苦しげに呻いて顔を背けた。
(臭い……汚い……)
千年の封印中、ミノタウロスの肉体が代謝していたのかどうかはわからない。けれど老廃物はしっかりと肉棒にこびり付いているようで、乳房で扱き上げるたびに腐肉の匂いがファリスの鼻腔へと流れ込み、犯してくるのだ。
「おい、顔を背けるな。もっと鼻を鳴らして、犬みたいにイチモツの匂いを嗅ぐんだ」
「そ、そんなこと……!」
出来るわけがない、とは言えなかった。ミノタウロスが少しでも豪腕を振るえば、バッツの頭は鉄球に潰されてしまうのだ。
魔物の肉棒に顔を寄せ、その饐えた汚臭を嗅がなければならない屈辱にファリスはギリッと奥歯を噛み締めた。死んでしまいたい、が……それは逃避だ。バッツを見捨てることだけは、ファリスにはどうしても出来なかった。
「……わかった。嗅げば、いいんだろ」
背けていた顔を正面へと戻し、改めて、胸に挟んだミノタウロスの獣棒を見る。乳房からはみ出したそれは大きく波打ちながら、早く嗅げとファリスを急かしているかのようだった。
(嗅げったって、どうすればいいんだ……)
ミノタウロスを満足させるためには、なるべく下品に、彼の加虐心を満足させてやる必要がある。そのためファリスは暫しの逡巡の後、言われた通り犬のようにスンスンと鼻を鳴らし、汚臭を鼻腔いっぱいに吸い込んでみた。
「うっ、……ぐ、ぶ……うえ え……ン、スン……ゥ」
(臭い、臭い臭い臭いいいっ! なんだよ、なんなんだよこの匂い……う、クソッ、クソォ……)

あまりの臭気に、ファリスは激しい吐き気と頭痛に襲われた。
磯で嗅ぐ腐った海産物よりもなお酷い匂いだ。畜舎に溜まった糞尿がおそらくはこのような匂いではないか、と思う。嗅いでいるだけで脳が直接痛めつけられ、壊されていくかのような、そんな事をファリスは錯覚しながら、それでも耐えた。耐えて、ミノタウロスを満足させるため下品に鼻を鳴らし続けた。
(こんなの嗅ぎ続けてたら、頭がオカシクなっちまう……畜生、この牛野郎……絶対、絶対に……殺してやる……バッツを助けたら、今度こそ、……う、……うぅげぇ)
「どうだ、チンポの匂いは気に入ったか?」
「誰が……気に入るもんか、こんな……――」
せめてもの悪態を遮るように、ミノタウロスは腰を突き入れ、ファリスの鼻へぶつけるように亀頭を胸の谷間から押し出した。
「ふぐっ!?」
鼻先スレスレ、悪臭の元がこびり付いた恥垢ごと迫る。目を白黒させ、嗚咽しそうになりつつもファリスはグッと堪えようとし、
(……あ、あれ……?)
微かな違和感に気付いた。
吐き気がするのも目眩がするのも変わらない。気持ちが悪くて目の前の醜い肉棒を叩き潰してやりたいのに、いつの間にか、意識せずとも身体は勝手に鼻を鳴らしていた。
(なんだよ……これ。なんで、こんな臭い……獣の、チンポの匂い……自分から嗅いでるんだよ、俺……?)
おかしい。そんなはずはない、と思うのに、眼前に迫る化物亀頭から目を離せず、顔を逸らせない。
「逆らえないのが不思議なようだが、それは当然のことだ。お前が雌である以上は、肉棒には逆らんのよ」
「ば、馬鹿げた……こと……言うな……ぁ」
「本当に馬鹿げた事だと思うか? 信じられんのなら、もっと匂いを嗅げ。頭の中をチンポの匂いで満たし、亀頭に口付けて舌を這わせてみろ。それでも我慢出来るようなら……いいぞ。お前の言うこの馬鹿げた事は、もうやめてやろう」
牛面の魔人が嗤う。

「本当……だな？」
その挑発自体、どうかしていた。このまま悪臭を嗅ぎ続け、亀頭に口付けして舌を這わすなど、嫌悪すべき事柄以外の何ものでもない。それでもバッツの命が懸かっているからにはやらなければ、やって耐えれば済むことだ、とファリスは己を鼓舞した。
（やっぱり……臭い……チンポ、臭いい……よぉ）
ツンと染みる匂いに涙を滲ませながら、胸一杯に息を吸い込む。悪臭の粒子が鼻腔に、咽喉にこびり付いて離れなくなりそうだ。
頭がボンヤリとして、思考に靄がかかる。考えることが億劫になっていくのを感じながら、ファリスは亀頭を凝視した。
（これに……こんなモノに、口付けなくちゃいけないのかよ）
怖気が走った。背筋を冷たいものが流れ、身震いしながらファリスは倒れたままのバッツを見た。頭から血を流しているが時折呻き声が聞こえる。まだ生きている、大切な仲間。自分にとって大切な、人。
（……バッツ……バッツ……う）
涙が一滴、頬を流れ、落ちた。
ミノタウロスの肉棒へ。
そのまま、涙が零れた亀頭へと震える唇を近付け、ゆっくりと、口付けていく。
（あ……俺……今、……キス、しちまった……こんな、化物の醜くて臭いチンポに……キス……）
胸が、頭が、痛む。動悸は激しくなり、朦朧とする意識は懸命にバッツと、レナとククル、亡き父やガラフへと助けを求めた。
このままでは危険だ、と何かが警鐘を鳴らしている。自身の意地と誇りに懸けて大丈夫だと言いたいのに、言葉が出ない。
「息が荒いな。興奮しているのではないか？」
「違……う……絶対、ちがう……」
呼吸が乱れ、吐き出された声も息もファリスにとって想定外の甘味を帯びていた。ミノタウロスの言葉を借りるなら、これではまるで雌のようだ。なのに自分の中で女の業が燃え上がり、形を成そうとしているのがわかってしまう。
「あ……はぁ……く、ふぅ……ひぅ、あぁ……ん、チュッ♥」

二度目の口付け。人の口程もあるミノタウロスの尿道口であるから、それはまさしく口吻そのものだった。ファリスを求めてパクパクと開閉するそこへ、無意識の内に舌が伸びる。
（なんだよ、これ……俺、今チンポ口のナカに舌、入れて……チンポと、深いキスしてる……う、ぁ）
自分で自分が信じられなかった。何がどうなっているのか、混乱したままの頭は用を為さず、舌先は尿道のナカにこびり付いた腐滓を剖ぐようにねっとりと丹念に動き回っていた。
「お、おお……いいぞ……そのまま、チンポを吸ってみろ」
言われるがままに、ファリスは丸く開けた唇で、顎が外れそうになりながら巨大な亀頭に喰らいつき、思い切り吸い上げた。その間も尿道口のナカを舌で穿るのをやめはしない。
（どうしよう……俺、自分からチンポ吸っちまってる……）
涙が溢れて止まらない。止まらないのは涙だけでなく、口や舌の動きもだ。どうして今自分はこんなにもうっとりと陶酔しているかのように肉棒を吸っているのか、ファリス自身どうしてもわからないでいた。ただ、酸っぱく苦い、このこってりと舌にまとわりつくかのような粘液と腐滓とを求めてしまっているのだけは、どうしようもなく確かで、非情な現実だった。
（臭い……チンポ……熱くて、硬いの、おっぱいに挟んで……扱いてるのだって、嫌なのに……こんな、舌でチンポ穴ほじって、ナカのチンカスまで舐め取って、吸って……なんだよ、なんでこんな惨めな……惨めなコト……俺、しちゃってんだよ……お♥）
「もっと舌を伸ばして、尿道の奥までほじるんだ……クク、先汁が出ているだろう？　下品な音を立てて、吸い上げてみろ！」
「ふぶっ、ん、んちゅぅ、ちゅるる……ふむぅ、ンッ、ちゅぢゅ、んぷふぁ……んレロ……ずぢゅぢゅ、ちゅぅう……ンンッ♥」
言われるがまま、舌を思い切り伸ばし、溢れてくる苦み走った汁を舐め、それを啜る。ドロドロの、まるで半固形物のようなそれは汁と呼ぶにはあまりに粘性が高すぎた。喉に絡み付き、息が詰まる。頭が、ぼんやりとしていく。
「うっとりと、イイ顔になってきたぞ。……胸で扱くのも忘れるな？　もっと愛を込めて、チンポを扱け」

「あ、愛……なんて……ふざけんじゃ……ひゥッ!? や、な、なんだよ、コレぇ……? お、俺……胸……ぇ♥ こんな、クソ汚いチンポ……挟んでるのに……嫌なの、にぃ……ふぁああ♥ なんか、おかしい……俺、おかしい……よぉ♥」

おかしい。おかしいはずなのに、乳房を両側から圧迫し、揉みしだく手の動きがどんどん激しくなっていく。ミノタウロスの膨張しきった獣肉棒の熱が胸に伝わり、火傷しそうだ。太い幹に浮かび上がった血脈が波打つたび、乳肉にもその動きが伝わってくる。乳首で大きくエラの張った部分を擦り上げると、全身に電流が走り、蕩けそうになってしまう。

「んはぁああっ♥ ち、畜生……この、野郎……絶対、絶対に、許されぇ……えぅ、ひ……んぁああッ♥ んむ、ずぢゅるる、ちゅぶ、ふむぅ、はぁ……いっ、はぁああン♥」

(バッツを助けるためなのに……嫌々やってるはずなのに、なんでだよ……なんでこんな臭いチンポ……魔物の牛チンポなのに美味しいって、しゃぶって、おっぱいで挟んで扱いて……俺、なんで感じちゃってんだよぉ……ッ!?)

涙が止まらない。もしかしたら気付かないうちに自分は魔法でもかけられたのではないか、いや、きっとそうに違いないと思い込みたい反面、ファリスは自身気付いてもいた。

この塔では魔法は使えない。薬を盛られた覚えも無い。

何より……わかってしまう。今のこの手の動きも、胸の熱も、勃起した乳首も、腐滓を求めて伸びてしまう舌も、亀頭に吸い付く唇も雄汁を飲み干そうとする喉も、全て、内側から湧き上がる自己の淫欲が為せるもの。女の業によってそうなってしまっているのだと、頭のどこかで別の自分がそう囁くのだ。

(嫌ッ、嫌だぁ……! こんな、こんな化物のチンポで浅ましく感じて、チンポ汁吸い上げて悦ぶなんてぇ……嫌だぁ! 助けて、バッツ助けてよぉ……早く目を覚まして、コイツをやっつけてくれよ……バッツ……バッツぅ……! でないと……俺……こんな、化物のクソチンポをパイズリして感じちゃう、惨めなチンポしゃぶり女にされちゃうよぉ……♥)

「お、おお……いいぞ。そうだ、そのまま……胸で竿を圧迫し、迫り上がってくる精液を押し出せ……くるぞ、もうすぐ……欲しいだろう? 先汁ではなく、本物の精液が!」

「ふぶぅうっ!? じゅぼ、ぢゅる……ふむ、ンッ、んむぅ♥」

管を昇ってくる極悪な粘液の塊、ミノタウロスの精液の動きが肉竿の動きから手に取るようにわかった。懸命に挟み込んだ胸が内側から押し返されてひしゃげる。いくら柔らかな部位だからといって、自分の胸がこんなにも形を変えるものなのだとファリスは初めて知った。その胸が、精液の上昇に合わせて柔肉を下から上へと波打たせていく。

(う、嘘ッ!? 本気、本気で射精するのかよ!? や、やだ、こんなチンポ坑に舌突っ込んで啜ってる状態でチンポ汁射精なんてされたら死ぬ、死んじゃう……! い、いやぁああああ!!)

「だ、射精すぞ全部飲み込めぇえ!!」

「ぐぶぉおおおおおッ!!」

目の前が爆発する。視界も頭も中も真っ白に塗り潰されるかのような感覚にファリスは一瞬意識を途絶させ、すぐさま口内を満たす獣汁の味、匂い、感触に目を覚ました。

口の中だけには到底収まらない。無遠慮に喉へと流れ込み、鼻腔を逆流して汚らしく鼻からも漏れ出ながら、ミノタウロスの射精は止まらない。呼吸が出来ず、咽せろうにもそれすら許されはしなかった。

(死ぬ!? 死ぬ死ぬ死んじゃうチンポ汁でおれころされりゅふぅうううううッ!?)

いつ果てるともなくミノタウロスの射精は続いた。その間、何度も意識を失っては回復し、もう腹の中も頭の中もファリスは精液で完全に満たされてしまっていた。

「千年ぶりの射精だ。さぞや濃厚で、美味かったろう」

「あぶ……お、ぼぉお……ほぉ♥ ……お、ご……ひ、ろぃい、こん、りゃの……あふ♥ うぶ、ぇえ……お、おりぇ……おが、ひくぅ……なりゅ……こわりぇ、りゅ……ぅ♥」

精液まみれで意識朦朧としているファリスを満足気に見下ろし、ミノタウロスは低く嗤いながら、ふと、思い出したかのように腕を振り上げていた。

FINAL FARIS FANTASY

「どれ、スッキリしたところで潰すか」
突然、鈍い音がしたかと思うと、つい今の今まで真っ白だった視界が赤く染まった。
「――え？」
ミノタウロスの言葉通り、何かを叩き潰すかのような音。
いったい何が起きたのか、ファリスは認識出来なかった。目の前で血と脳漿をブチまけているソレが何なのか、わからない。
頬がヒクヒクと痙攣し、唇がいつの間にか歪に笑みを形作っていた。震える唇が、確かめるようにソレへと問いかける。
「……バッツ？」
返事など、あろうはずがない。
ソレはもうただの物言わぬ肉塊だった。
命の無い、血と内臓と肉の詰まった皮袋だ。それすら一部がグズグズと漏れ出し、床を汚してしまっている。飛び出した眼球、血の赤にまみれつつもやや黄ばんだ肉片。白い骨の欠片。かつて命だったものが、流れ出して――
「あ……あ……あ、あああ、……あぁあああああああ!!」
我に返る。
返りたくなど無い。ソレが、バッツなのだと認めたくない、認められない。それでも、バッツなのだ。
「バッツ！ バッツバッツバッツ！」
バッツの前へとしゃがみ込むと、道具袋からフェニックスの尾を取り出し、ファリスはそれを嚼した。が、何も反応はない。
「な、なんだよなんで……あ、アレイズ！ アレイズ!!」
フェニックスの尾では効果が薄いのかも知れない。なら完全蘇生呪文ならどうだ、と唱えてみるも魔法の力は塔に張られた結界に打ち消され、魔力は宙に霧散した。それでもファリスは諦めず魔法を唱え、道具を使い続けた。
「レイズ！ レイズレイズレイズ！ エ、エリクサーだ、飲めよ、飲めよバッツ！ エリクサー！ エリクサーだってばエリクサー！ 勿体なくなんて無いから、全部飲んでいいから！」
「ククク。哀れなものだが……俺はまだ満足していないのでな」
「ぎひぃいいいいいいいいッ!?」

バッツへ向かい必死になって魔法と道具を使っていたファリスの尻を鷲掴むと、ミノタウロスは前戯も無くその秘裂へ肉凶器を叩き込んでいた。腹が剛直の形に膨れ、激痛が走ったが、ファリスはまだバッツの蘇生を諦めようとはしなかった。
「ケアルケアルケアルケアル!! ポーション、ポーションでもいいから飲めよ、飲めよ飲めよ飲めよ飲めよ飲んでくれよおバッツ、バッツバッツバッツバッツバッツバッツバッツぅう!!」
「グハハハハ！ 無駄だ無駄だ、頭を粉々にぶっ潰されても生き返ることの出来る人間などいるものか！ お、おお……いいぞ、この締め付け……たまらん！」
ミノタウロスが腰を振るたびに膣壁が刮がれ、子宮を拳で殴りつけられるかのような衝撃が走った。女の身体はこんな状況でも恨めしいくらいに発情し、愛液を垂れ流して悦んでいる。
そんな中、ファリスは口に含んだポーションをバッツに口移しで飲ませようとした。が、顔が半分崩れてしまっている彼は、どんなに飲ませようとしても千切れた頬から零れてしまう。
「あああああバッツ！ バッツが死んじゃう、死んじゃうよぉ！」
「もう死んでる……っても、聞こえていねぇか。そら、お前の喘ぎ声で彼氏を送ってやるがいい!!」
「あひぃいいィイイッ!? いぎ、はぁあんおおおぐほぉおおおお♥ バッツ、バッツバッちゅふぅいいぃぁあああああ♥」
目からは涙を、鼻からは精液を、口からも精液と唾液を垂れ流しながら、バッツを甦らせようとするファリスの顔は、いつの間にか笑っていた。法悦と快楽に酔いしれ、叩きつけられるミノタウロスの腰に向かって自らも尻を振る。もっと奥まで、剛直を咥え込もうと身体が勝手に動いてしまう女の性だった。
「バッツバッツバッツバッツぅン♥ ひぅぅうポーションンポーションンッあはぁあイクッ、バケモノチンポでイグゥウウおれおかしくなるぅううバッツぅひぁあああああ♥」
絶望の中で絶頂を迎えながら、やがてファリスの精神は、官能の海溝へと深く、深く沈んでいった。
床に転がるバッツの眼球が、アクメを晒すファリスを虚しく見上げていた。

THE MINOTAUR'S SARISA

寒天示現流